

世界文学全集 37

ゴーリキイ
ど ん 底
幼 年 時 代
私 の 大 学

神西 清 湯浅芳子 蔵原惟人 訳

河 出 書 房

世界文学全集 37 ゴーリキイ



© 1969

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚 富雄
中島 健蔵

昭和37年9月25日 初版発行

昭和44年8月1日 14版発行

定価 430円

訳	者	神	西	清
		湯	浅	子
		蔵	原	人
発	行	中	島	隆
印	刷	草	刈	龍
装	幀	原		平
				弘
印	刷	・中央精版印刷株式会社		
製	本	・中央精版印刷株式会社		

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

ど ん 底 一

幼 年 時 代 七

わたしの大学 三二

年 譜 四五

解 説 (中野重治) 四九

どん底
(四幕)

神西清訳

コンスタンチーン・ペトロヴィチ・ピャトニーツキイに捧げる

—— M・ゴーリキイ

ゆるやかに 極めて静かに 合唱

独唱 るでもひるでも、く らいよろうや、

独唱 あ け - く れ ろ う も り - - が え い え - - え!

合唱 わ が ま と み は る。 み 独唱 は ら ば み は れ よ。

合唱 に げ は せ ん ぞ え。 し ゃ ば - に は て た

独唱 い - - が。 え い え - - え く さ り が き れ ぬ。 合唱

劇中の歌

夜でも昼でも、
暗いよ牢屋。
あけくれ牢守が、
えい、え、え！
わが窓みはる。
見張らば見張れよ、
逃げはせぬぞえ。
娑婆には出たいが、
えい、え、え！
鎖が切れぬ。
ああ、この鎖が、
鉄の牢守よ。
切るにも切られず……

登場人物

コスティリョーフ（ミハイール・イブーノフ）（松葉杖、
意味）五十四歳、木賃宿の主人

ヴシリャ（カールボヴナ）その妻、二十六歳

ナターシャ 彼女の妹、二十歳

メドヴェージェフ（アブラーム）（熊と）彼女たちの
叔父、調査、五十歳

ペーベル（ブーシカ）（灰と）二十八歳

クレーシチ（アンドレイ・ミートリチ）（やつとこ）
錠前屋、四十歳

アンナ その妻、三十歳

ナースチャ 未婚の女、二十四歳

クブシニャー（こね粉桶）肉まんじゅうを売る女、四十
歳近い年配

ブブノーフ 帽子屋、四十五歳

サーチン ほぼ同年配、四十歳近い
役者

男爵 三十三歳

ルカー 巡礼、六十歳

アリョーシカ 靴屋、二十歳

めっかちゾーブ 荷かつぎ人足
だった人

ほかに、名なし無言の浮浪人たち数名。

第一幕

ほら穴のような地下室。

天井は、重苦しい石造りの、漆喰のはげた煤だらけ
の丸天井。光は見物席からのと、右手の角窓をと
して上から下へ落ちるのと。

右手の隅は、薄い羽目板で仕切られたペーベルの部
屋になっており、そのドアのそばにブブノーフの板
の寝床。左手のすみに、ロシヤ式の大きな暖炉。左
手の石壁に、台所へ通じるドアがあり、そこにはク
ブシニャー、男爵、ナースチャが住んでいる。暖炉
とドアの間は、壁に寄せて幅のひろい寝台があっ
て、きたならしい更紗のカーテンがかかっている。
どの壁にも板の寝床が作りつけてある。舞台手前、
左手の壁ぎわに、万力と小型な鉄砦とを取りつけた
切り株があり、もう一つ少し低い切り株がある。そ

れにクレーシチが腰かけて、鉄砦に向かい、あれかこれかと鍵を古錠前に合わせてみている。その足もとには、さまざまな鍵を針金の輪にとおした大きな束が二つ、ブリキ製のゆがんだサモブル、金鎖、大小のやすりがころがっている。

この泊まり部屋の中央には、大テーブルが一つ、ベンチが二つ、丸床几が一つあり、みんな白木のままでよごれている。その大テーブルに向かって、サモブルに寄り添い、クヴシニャーが主婦きどりでいる。

男爵は黒パンをかじっており、ナースチャは丸床几に腰かけて、テーブルに肘をつきながら、ぼろぼろの薄い本を読んでいる。カーテンのかかった寢床では、アンナが咳をしている。ブブノーフは寢床に腰かけて、帽子の木型を膝の間にたくし込み、ほぐした古ズボンをそれに当てがいながら、裁ち方を思案している。そのそばには、ひさしを作るため引き裂いた帽子用ボール箱が一つ、そのほか油布やボロ布が散らばっている。サーチンは今しがた目をさまして、寢床に横になったままだ。ベチカの上では、姿の見えない役者が、ごそごそしたり、せきこんだりしている。

早春。朝。

男爵 ふむ、それで！

クヴシニャー うるさいねえ、おまえさん、いい加減にしとくれよ。あたしゃね、つくづく骨身にこたえたんだから……こうなったらもう、たとえ蝦フライを百匹くださろうと、結婚なんざまっぴらさ！

ブブノーフ（サーチンに）何をぶうぶうなってるんだ？

サーチン うなる。

クヴシニャー はばかりながらあたしゃね、だれ気がねのない自由な女さ。それを今さら、他人の籍へ入れてもらおうの、男の奴隷に成りさがろうのって、へん、おかしくって！ たとえ先様が、アメリカの皇太子だろうと、だれが嫁ってやるもんか。

クレーシチ うそつけ！

クヴシニャー なんだと？

クレーシチ うそをつきなことよ。てめえ、巡査のアブラムと、いっしょになるんじゃないか……

男爵（ナースチャの本を引いたくって、表題を読みあげる）『運命の恋』か……（笑う）

ナースチャ（右手をのぼして）ねえってば……お返ししよう！ さ……冗談じゃないよ！

男爵（彼女を見ながら。本を高々と振り回す）

クヴシニャー（クレーシチに）この赤毛の死にそこないめ！ おまえさんこそ、うそつきじゃないか！ よくも、いけしやあしやあと、あたしにそんな口がきけたもんだね？

男爵（本でナースチャの頭をたたきながら）ばかだなあ、おまえは、ええナースチャ……

ナースチャ（本をひったくって）およこしつたら……

クレーシチ まったくおめえは、たいした奥方さまよ……そのくせ、アブラームの野郎といっしょになろうってんだ……そればかり待ってやがるくせに……

クヴシニャー あたりきさ！ 言うだけ野暮じやないか！……悪かったねえ！ ところがおまえさんは、かみさんをいびり抜いて、半殺しにしたってね……

クレーシチ 黙れ、ばばあ犬め！ てめえの知ったことじゃねえ……

クヴシニャー へへえだ！ 耳が痛いてね！

男爵 そうら始まった！ おい、ナースチャ、——気は確かい？

ナースチャ（頭をあげずに）いいってば……あっちへお行きよ！

アンナ（カーテンから首を出して）また一日が始まるのいちにち

ね！ 後生だから……そうどならないでよ……けんかしないでね！

クレーシチ また、めそめそか！

アンナ ほんとに来る日も来る日も……せめて死ぬだけでも静かにさせてよ！

ブブノーフ 騒いだって、往生の妨げにやなるめえ……クヴシニャー（アンナのそばへ寄って）でもねえ、おまえさん、よくもまあ、あんな悪党と暮らして来たもんだねえ？

アンナ ほつといて……いいから、ほつといて……クヴシニャー ほんとにさ！ おまえさんの辛抱づよさには……あきれるよ！……どう、ちつとは胸が軽くはならないかい？

男爵 おいクヴシニャー！ そろそろ市場いちばへ出かける時間だぜ……

クヴシニャー ああ、出かけよう！（アンナに）肉まんのほかほかを上げようか？

アンナ せつかくだけれど……ほしくないわ。食べたつてむだだもの。

クヴシニャー まあ、おあがりよ。熱いやつは、胸が休まるよ。小皿さじに分けて、置いとくからね……食べたくなったら、おあがり！ さあ参りましょう、御前……

(クレシチに) へん、業つくばりめ…… (台所へ去る)

アンナ (咳き込みながら) ああ、たまらない……

男爵 (そっとナースチャの後ろ首をつついて) いい加減にしるよ、ばか!

ナースチャ (つぶやく) うるさいったら……おまえさんの邪魔はしてないじゃないか。

男爵、いまいしげに口笛を吹きながら、クヴシニヤを追って退場。

サーチン (寝床の上で起きあがりながら) きのう、おれをなぐりやがったのは、だれだっけ?

ブブノーフ だれだっていいじゃねえか?

サーチン じゃまあ、そうとして……なぜなぐりやがったんだ?

ブブノーフ おめえ、カルタをやったろう?

サーチン やったさ……

ブブノーフ だから、なぐられたのよ……

サーチン ち、ちきしょう……

役者 (ベチカの上から首を出して) 今におめえ、ほんとにぶっ殺されちまうぞ……

サーチン 何を、このばか野郎。

役者 へ、なぜだい?

サーチン 二度もぶっ殺されるやつがあるかよ。

役者 (ちょっと絶句して) わからねえ……なぜねえんだい?

い?

クレシチ いいから、さっさとベチカから降りて、部屋の掃除でもしな……何をのほほんとこまえてやる?

役者 おめえの知ったこっちゃねえや……

クレシチ 今に、おかみがやって来りや、だれの知ったことかわかるさ……

役者 へ、おかみが何でえ! 今日男爵が掃除番なんだ。……やい、男爵!

男爵 (台所から出て来ながら) 掃除なんかしてられるかい……これからクヴシニヤといっしょに市場だ。

役者 おいらの知ったこっちゃねえや……いっそ、懲役にでも行きやがれ……とにかく床を掃くなあ、おめえさんの番だよ……おれあ、人の分まで働くなあごめんだ……

男爵 ふん、勝手にしろ! かわいいナースチャが掃いてくれらあ。……なあ、『運命の恋』先生! しつかりしろよ! (ナースチャの本をひったくる)

ナースチャ (立ちあがりながら) どうしたって言うの? およこしたら! いけずうずうしい! 御前さまが

聞いてあきれよ……

男爵（本を返しながら）な、ナースチャ！ おれの代わりに掃除してくれよ——いいな？

ナースチャ（台所へ行きながら）飛んでもないよ……ばかばかしい！

クヴシニャー（台所のドアからのぞいて、男爵に）いいから、おまえさん、行こうよ！ 掃除なんか、だれかしてくれるさ。……ねえ親方——頼まれたら、してやるものだよ……まさか、首ねっこが折れもしまいに！ 役者 ちえっ……しよっちゅう、おれだ……どうもわからねえ……

男爵（台所から籠を二つ天びん棒でかつぎ出す。籠には、ほろで包んだ甕がはいっている）今日は、ばかに重いぞ……

サーチン よくぞ男爵に生まれけりか……

クヴシニャー（役者に）いいね、掃除をしとくんだよ！

男爵を先に立てて、表口へ出て行く。

役者（ペチカから這いおりながら）おれは、ほこりを吸うのが毒なんだ。（自慢そうに）なにしろおれのオルガニズム（有機組織）は、アル中なんだ……（板の寝台にかけて考えこむ）

サーチン オルガニズム……オルガノーン（哲学用語で機関の意）

か……

アンナ ちよいと、あんた……

クレーシチ なんだよ？

アンナ 肉まんをお食べて、クヴシニャーが取っといてくれたはずだよ……わたしゃいいから、おまえさん、おあがりよ。

クレーシチ（そばへ寄って）じゃ、おまえは——食わねえのか？

アンナ いらぬい。……食べたってしょうがないもの。

あんたは、働くんだから……食べなきゃいけないよ……

クレーシチ 気に病んでるな？ なあに、くよくよする

こたあねえ……まだそう何も……

アンナ ね、あっちへ行っておあがりよ！ わたしゃ、苦しくって……おっつけ、もう……

クレーシチ（離れながら）なあに……そのうちまた……起きられるさ……よくあるこった！（台所へ退場）

役者（大声で、急に目がさめたように）きのうだ、病院のドクトルが言いやがった——きみのオルガニズムは、ぜんぜんアルコール中毒じゃ……

サーチン（にやにやしながら）オルガノーンがな……

役者（強情に）オルガノーンじゃねえ、オル・ガ・ニ！

ズムだ……

サーチン 南蛮缺舌だ……(原文は「シカンブル」とある。これは

群に住んでいたもの。要するにサーチンがややらしい言葉をどっさり知っている一例である)

役者(相手に向かって片手を振って) 何を、ばかな!

おれはまじめに言ってるんだぞ……いいか。もしオルガニーズムが中毒だとすりゃあ……つまり、床を掃いてさ……ほこりを吸うなあ毒なわけだ……

サーチン 不老長寿のマクロピオチックか……へっ!

ブブノーフ なんだい、そりゃあ?

サーチン 言葉さ。……まだあるぞ、——トランスツェ

ンデンタール(先験的)と来らあ……

ブブノーフ そりゃなんだ?

サーチン 知らねえ……忘れちゃった……

ブブノーフ じゃ、なぜ言うんだ?

サーチン そうさなあ……つまりおれは、人間の言葉に、

あきあきしたんだな……おれたち人間の言葉が、みんな、あきあきしたのさ! どれもこれも……ざっと千

べんは聞いたものなあ……

役者『ハムレット』という芝居(レベユ)のなかに、「言葉、言葉、

言葉!」ってあらあ。ありや、いい芝居だ。おれは、

墓掘りの役をやったっけが……

クレーシチ(台所から登場) じゃあ、ぼつぼつお掃除役

と願おうか?

役者 うるせいやい……(片手で胸をたたいて) オフィ

ーリアどの! 躬が上も、ともども祈ってくりやれ!

……

舞台裏の、どこか遠くで、にぶいざわめき、叫び声、

巡査の呼び子。クレーシチは仕事にかかり、やすり

の音を立てる。

サーチン おらあ、珍ぶんかな、妙な言葉が好きさ。

……これでもガキのころにや……電信に勤めてな……

本はずいぶん読んだもんだ……

ブブノーフ へえ、おめえ、電信をやってたのか?

サーチン そうよ。……とつてもすばらしい本があるん

だ……それに、どっさりおもしろい言葉もな。……お

れはこれでも、教育のある人間だったんだ……なあ?

ブブノーフ 伺ったよ、百ぶんぐれえもな! 昔や、そ

れでも偉かったってね!……そう言や、おれだって、

もとは毛皮屋の親方だよ……ちゃんと工場(工場)を持ってた

んだ。……両手は染め粉で、まっ黄色だったものよ。

なにしろ毛皮を染めるんだからな——手も腕も、肘ん

とこまで黄色かったもんだ! で、おらあ考えた、こ

いつあ死ぬまで落ちまいてな……黄色い手をしたま

んま、往生するんだらうってな。……ところが今じゃ

どうだ……両手とも、ただうす汚ねえだけよ……そうよ！

サーチン それが、どうした？

ブブノーフ そいだけよ……

サーチン なんて、そんな話をしたんだ？

ブブノーフ まあさ……物のたとえによ。つまりさ、いくら上辺を塗ったところで、やがてすっかりはげちまう……きれいさっぱりはげちまう、そうよ！

サーチン だがどうも……骨つぶしが痛んでならねえ！

役者（膝を両手がかかえてすわる）教育なんざ、くだらねえもんだ。大事なのは天才だ。おれの知り合いの役者なんざ……綴りをたどりたどり、やっと書き抜きが読めるやつだったか、いざ役をやらして見ねえ……見物が湧いて、小屋は割れ返る、ぐらぐら揺れるって騒ぎさ……

サーチン おいブブノーフ、五銭くんなよ！

ブブノーフ おら、二銭しかねえ……

役者 いいかい——つまりは天才さ、立役に必要なのはな。ところで天才ってものは、自分を信じる、自分の力を信じるってことなんだ……

サーチン なあ、五銭くんなよ。そしたらおまえさんを、

天才で、大立者で、青大将で、署長閣下だと思ってや

らあ、……やい、クレーシチ、五銭くんなよ！

クレーシチ おととい来やがれ！ どいつもこいつも、そんなのばかりだ……

サーチン へ、何をほえやがる？ 一文もねえんだろ、

先刻ご承知だあ……

アンナ ねえ、あんた。……息がつまるよ……切ないよ……

クレーシチ どうしろって言うんだい？

ブブノーフ 表の戸をあけてやりねえ……

クレーシチ そいつはいいや！ おまえさんは、寢床にふんぞり返ってるが、こっちは床べただ……一つ入れ代わりと行こうじゃねえか。その上で、あけるなり何なり勝手にしねえ……でなくてさえ、おら風邪っ気なんだ……

ブブノーフ（平然と）あけてもらいてえのは、おれじゃ

ねえ……かみさんの頼みなんだぜ……

クレーシチ（陰気に）はいはい言ってたら切りがねえや……

サーチン 頭ががんしやがる……畜生！ 一体なんだって人間は、頭をなぐり合うんだろうなあ？

ブブノーフ なあに、頭だけじゃねえ、からだじゅう、

どこもかしこも見境なしよ。（立ちあがって）どうれ、

糸を買って来るか。……ところで、亭主もおかみも、今日はさっぱり顔を見せねえな……まさか、くたばりもしめえが。(退場)

アンナ 咳きこむ。サーチンは両手を頭にかけて、じっと横たわっている。

役者 (ものうげにあたりを見まわし、アンナのそばに寄って) どうだい? よくないかい?

アンナ 息が苦しい。

役者 なんなら、表口へ連れてってやろうか? さ、起きな。(手を助けて起こしてやり、女の肩にあり合わせの毛皮をかけて、腕でささえながら表口へ連れてゆく) さあさ……しっかりしな! おれだって、病氣なんだ……アル中なんだ……

コストイリョーフ (戸口に現われる) 散歩かね? いや、お似合いだな、牡やぎに牝やぎか……

役者 どきな、どきな……病人どうしのお通りだ、なあ? コストイリョーフ さあさ、お通んなさいとも。……

(なにやら聖歌らしい鼻歌を歌いながら、うさぐさそうに部屋の中を見まわし、やがて首を左へかしげて、ペーペルの部屋の気配をうかがうこなし。クレーシチは、鍵束かぎたばをやけにガチャつかせ、やすりをキイキイいわせながら、上目づかいに亭主の動静をうかが

う) ガリガリやつてるなあ?

クレーシチ え、なんだい?

コストイリョーフ ガリガリやつてるね——ってこと

さ。(間) だが……ええと、その……何を聞こうと思つたっけな?——(早口に、小声で) 女房が来やしなかつたかい?

クレーシチ いいや、見なかったね……

コストイリョーフ (そろりそろりとペーペルの部屋のドアへ近づきながら) 月二両の間代でよ、おまえさんえらく場所を取ってるじゃねえか! 寝台ねだいは使う……そこにおミコシはすえる……いやはや! 五両がそこはあるぜ、まったくよ! とにかく五十銭は値上げしてもらわにや……

クレーシチ いっせ、この首へワナをかけて、絞め殺すがいいや。……棺桶かんとくへ片足つつこんでるくせに、小銭の勘定ばかりしてやがる……

コストイリョーフ おまえさんを絞め殺して何になる? だれの得にもなりやしねえ。まあ、せいぜい長生きして、たんとい目を見るがいいさ。……おれはな、五十銭値上げして、それでお燈明の油を買おうってんだ……すると聖像の前で、おれのお供えがちらちら燃える。……そこでさ、そのお供えがおれの罪ほろぼしに

もなれば、おまえさんの罪障消滅にもなるうってものだ。第一おめえは、自分の罪障なんてことを思ったこともあるめえ……な、あるめえ。……だがな、クレーシチ、おめえは悪党だぞ！ おめえのかかあが肺病になったのも、おめえの仕打ちが悪いからだ……だれひとり、おめえを好くやつはいねえ、買う者もいねえ……そもそも、その商売からしてよくねえや。ガリガリ・ギシギシ、はた迷惑だ……

クレーシチ（どなる）て、てめえは、おれに……けんか売る気か？

サーチン、大声でうなる。

コスティリョーフ（ぎくりとして）おどかずでねえ、ええ大將……

役者（はいつてくる）かみさんを表口にすわらせて、よくくるんでやったよ……

コスティリョーフ ほんとうにおめえは親切もんだよ！ いいことをしてやった……善根をほどこせば、その報いはきつとある……

役者 いつあるんだ？

コスティリョーフ あの世界でな、おまえさん……あの世界へ行けば、おれたちのしたことはみんな、ちゃんと報いがあるんだ……

役者 それよかいっそ、今おまえさんから、善根の報いとやらをもらいてえな……

コスティリョーフ このおれに、なんでそんなことが？ 役者 借金を半分まけな……

コスティリョーフ へ、へ！ またそんな冗談を。おまえさん、相変わらずだなあ。……人の親切というものが、銭金で買えるとも言うのかい？ 親切は、どんなお宝より貴いものだ。ところが、おまえさんがおれに借りた金は——どのみちつまり借金だ！ だから、このおれに返してもらわにやならない。……おれのような年寄りには、そろばん抜きで親切にしてくれるのが人の道だ……

役者 ヘッ、死にそこねえの業つくばりめ……（台所へ去る）

クレーシチ立ちあがって、表口へ出て行く。

コスティリョーフ（サーチンに）ガリガリ屋だね、今のは？ 逃げてきやがった、へ、へ！ あいつ、おれがきらいなんだ……

サーチン 悪魔でもなけりや、だれがおまえさんを好くもんかよ……

コスティリョーフ（あざ笑って）ごあいさつだな！ だが、おれの方じゃ、おまえさんたちがみんな好きだ

……おれはこう思つてゐる——おまえさんたちはみんな、不仕合わせな、寄るべのねえ、落ちぶれた人たちだと。……（いきなり早口で）ところで……ペーベルは、いるかい？

サーチン のぞいて見ねえ……

コストイリョーフ（ドアへ寄つてノックする）ペーベル！

役者が台所の戸口に現われる。何かもぐもぐやつてゐる。

ペーベルの声 だれだ？

コストイリョーフ おれだ……おれだよ、ペーベル。

ペーベルの声 なんの用だ？

コストイリョーフ（あとずさりしながら）開けてくれ

……

サーチン（コストイリョーフを見ずに）開けたら最後、

レコがいらあ……

役者、鼻を鳴らす。

コストイリョーフ（心配そうに小声で）え？ だれが

ゐるって？ おまえさん……何て言つたね？

サーチン 何さ？ おれに言つてゐるのかい？

コストイリョーフ おまえさん、何か言つたじゃねえ

か？

サーチン なあに……ひとり言よ……

コストイリョーフ 氣をつけた、兄弟！ 冗談にもほどがあるぞ……なあ！（はげしくドアをたたく）おい、

ペーベル……

ペーベル（ドアをあけながら）なんだ？ うるせえじゃ

ねえか？

コストイリョーフ（部屋をのぞきこみながら）おれは

……ただその……おまえに……

ペーベル 錢でも持つて来たのか？

コストイリョーフ ちよつと話があつてな……

ペーベル 錢を——持つて来たかよ？

コストイリョーフ なんの錢だい？ やぶから棒にさ

……

ペーベル 錢よ、七両よ、時計の代だ——なあ？

コストイリョーフ 時計だって、ペーベル？……ああ、

こいつ……

ペーベル へ、白っぽくれない！ きのう、お立ち会

いの前で、時計を十両でおまえに売つたじゃねえか

……三両だけは——確かにもらつた。あとの七両を、

もらおうじゃねえか！ 何を目ばかり、ばちくりやつ

てるんだ？ ふらふら歩き回りやがつて、人の邪魔し

やがるくせに……自分のこたあ忘れてやがる……

コスティリョーフ しっ！ ま、そう怒るなよ、ペーベル。……あの時計だが、——あれはその……

サーチン どうせ曰くつきよ……

コスティリョーフ（厳格に）おれは、盗品なんざ受けつけねえ……よくもてめえは……

ペーベル（相手の肩をとらえて）じゃおまえは、なんだっておれを起こしやがったんだ？ なんの用があるんだ？

コスティリョーフ いいや……べつにその何さ……おら、もう行くよ……おまえがそんなに……

ペーベル けえれ、そして銭を持って来やがれ！

コスティリョーフ（出て行く）畜生、ひどいやつらだ！
いやはや……

役者 喜劇だ！

サーチン いいぞ、いいぞ！ こいつあ気に入った……

ペーベル あいつ、何しに来やがったんだ？

サーチン（笑い声を立てながら）わかんねえのか？ か

かあを捜しによ……だがな、おめえ、何だつてやつを

バラしちまわないんだ、え、ペーベル！

ペーベル あんな野郎のため、一生を棒に振るなあまっ

びらだ……

サーチン そこはおまえ、うまく立ち回るのさ。それか

ら——ヴシリーサを女房にようぼうにして、ここの亭主ていしゅにおさまるんだ……

ペーベル ありがてえ仕合わせだな！ そこでおめえた

ちは、おれの身代みしろばかりじゃねえ、こっちの人の善い

のを幸い、おいらの身がらまで飲んじまおうっていう

んだろう。……（寝台に腰をおろす）因業いんごうじじいめ……

寝てるところをたたき起こしやがった。……すてきな

夢を見てたんだぜ。おら、釣りをしてたんだ。すると

さ、かかったねえ、どえらいウグイがよ！ あんなで

つかいウグイは、夢でなけりや、とてもお目にかかれ

ねえ。……竿さおをさばいちゃみるが、糸が切れそうで気が

が気じゃねえ！ そこで、手綱てづなをかまえてな……ほ

れ、もう一息、というところで……

サーチン そりゃあウグイじゃねえ、ヴシリーサだった

ろう……

役者 ヴシリーサなら、もうとつくに、かかってらあな

……

ペーベル（腹だたしく）ええい、てめえらみんな、鬼に

食われちまえ……あのアマっちょもいっしょにな！

クレーシチ（表口からはいってくる）えれえ寒さだ……

ぶるぶるぶる……

役者 なんだってアンナを連れて来てやらねえんだ？